あるがままの自然が子どもたちのフィールド 「子育ち」を見守る ●子どもネットワークセンター天気村

○○○○

●山田貴子代表理事

「天気村」は元気な子どもたちの拠点です。天気には雨や風、嵐があってもいつか必ず晴れるからと、代表の山田貴子さんが付けました。設立は1987年、当時中学校教師をしていた山田さんが画一的な学校教育に限界を感じ、退職して始めた活動です。天気村は草津川沿いの閑静な住宅街の中にあり、教養棟(事務室・体育室・喫茶店)と、保育室がゆったりとした敷地に並んでいました。最初は地域の人々が集い語り合うギャラリーと喫茶店を開き、4年ほどのち幼児教室「こんぺいとう」など、子どもと親のための活動に事業基盤を移しました。「こんぺいとう」は豊かな自然の中で自由に遊ぶ自然保育園です。この他小学生たちの「あそび隊」や母親・家族をサポートするプログラムなど、子どもを主体としながら人・まち・環境を視野に入れ、社会との関わりを大切にした多様な活動を展開しています。

「子育ち」を見守る“こんぺいとう”保育園

「子育て」ではなく「子育ち」。15年にわたる子ども教育の現場から学んだ山田さんの信念です。子どもには自分で育っていく力がある。子どもの個性を伸ばしてあげながら育ちを見守る。子育ちしながら、親も育っていきます。自然をフィールドとする「こんぺいとう」の保育は、のびのびと遊ぶ幼児たちの「子育ち」を見守ります。子どもは山里でも街でもごく自然に人々に受け入れられる存在。「子どもこそバリアフリーそのもの」と山田さん。地域の人々との交流から、農家で芋掘りや野菜摘み、馬舎では子馬の誕生も見学、川遊びに鎮守の森など自然保育の現場は無限で、子どもたちは自由に遊び回ります。ここではケガが勲章。子どもは一度危ない目にあうと、自分の身体を通して限度を覚え、返って危険度は減るものです。「こんぺいとう」の由来は「こんぺいとうのように、とんがり(個性)のある元気な子どもに自分の力で育ってほしい」と付けられました。自然保育園は週4日。その日のお天気と子どもの意見で当日の活動を決めるため、スケジュール表はありません。さまざまな場所で遊びと交流を体験し、自ら育つ力を付ける保育です。

イメージする力の大切さ

●野外でのびのびと遊んで「ハイ、チーズ!」

長年の教育経験から山田さんは、イメージする力を幼児から養うことが大切だと考えています。野外保育は右脳の発達を促し、右脳と左脳のバランスを良くして3歳児でも自分なりのイメージ力を持つようになります。共働きなどで親子の距離が離れていても、子どもにイメージ力があると両親の働く姿のイメージが湧き、共感や共有ができる。勉強も“自分が何をしたいか”のイメージがあると、親や教師に強要されずとも自ら実現に向けて邁進する。自分の目標やイメージがない子に、さまざまな圧力をかけるからキレてしまう。幼児期にイメージ力を育ててあげること。過保護を避け少し距離をおいて子どもの「自分育ち」を見守ることが大切と、話されました。

エココインを使って社会性を持った活動へ

エココインは子どもたちが「地域のイベントや商店街のお使いなどへ積極的にでかけ、社会性が身につくように」と考案されたアルミコインです。ある企業が鉄板の切れ端から作ってくれました。「あそび隊」の活動や天気村の行事、ボランティアへ参加すると1枚、お使いをすると商店街から貰えます。全種類12枚集めると協賛企業から環境グッズが賞品に。子どもたちはエココインを入手する過程で、自分の住む街や人々、自然環境と触れ合う仕組みです。「北海道や九州などで同様な試みが行われ、各地域の子どもたちがコインを通じて交流できると、子どもの夢やイメージがふくらむ」山田さんの発想に共感し、天気村の発展に期待する取材でした。

(取材・文責　青木孝子)